

飛耳長目

通巻178号 平成30年9月1日発行

死生観特集 第三弾

西晋一郎先生 ご臨終の後先

森みさを

この手紙は前号で記したように、三河の同士森武士氏の長女みさをさんが当時西先生のところにお手伝いにあがっていて、臨終の様様を私宛てに送って寄せられたもので、一個の歴史的な文献といつて良いと思う。前後の重谷姉の文章と改めて併せて読まれることを願う。(信)

拝啓 先達では突然電報にてその後失礼致しております

このたびは思いもかけぬこととて、わたくしどもも未だに夢のような気がいたします。少しでも早く西先生の生きていらつしやいます時に森信三先生にお知らせ出来なかつたことを先生に申し訳なく思っております。もう一月経つてしまいました。ちょうど昨日がご命日に当たります。

昨日もご霊前にて泣きました。先生はあれがお好きだった、あれもこれもと、一生懸命にお供えしても、何とおおしやいませ。遠くから先生の御徳を慕って贈られました数々のお品も、今は働きものとなつてしまいました。もはやこの家に先生がおいでにならないかと思つて、毎日毎日の生活が、どことなく張り合ひのない淋しい思いでいつばいでございます。

奥様とても心残りのご様子で、時々ご霊前にて先生の後を追いかけて行きたいようなことを申しておられます。ご遺骸は八畳の間に安置してございます。来春三月郷里鳥取の方へお帰りになられます。つい昨日まで元気でいらつしやつた先生でしたのに、お亡くなりになつたとはどうしても考えられません。

十月の初め頃でしたか、ちょうど勤務の学校に行かれます時に、ズボンを穿かれようと思われた途端に、腰が痛んで、その頃から少しお体の様子がよくないようございました。それから十日頃でしたか、一番最後に兵学校に行かれます時に、ノドが痛むような様子でございました。

奥様もお年をおとりになつていらつしやいますこととすし、十月の半ばではありますし、風邪気ぐらいに思つておられました。時々良くなりましたが、それからだんだん奥の方が痛んで「寒気がする」とおつしやつて、時々お寝みになつていらつしやいました。

古くから懇意の田村小児科医に診てもらつておられました。だんだん進行してくる様子で、どうもはつきりしないで、いつもいつも、37度から8度位お熱がございましたが、お食事だけはお熱がありまして通常と少しも変わらさず召し上がつておられました。そして寝たり起きたりして、暫くそういう状態がございましたが、ノドの方がだんだん奥が痛みますし、田村さんは「どうも扁桃腺のように思いますが、しつこいようですな」と笑つておられました。

それから肩が凝つたり、腰の方が痛みますので、田村さんの方から横山という耳鼻科の方を願ひして、ちよつと出られますのが難しいようでした。しつこいので、二回ほど往診して頂きましたが、先方の方で大変面倒がられますので、その翌日から毎日厚生車に乗つて通つておられました。暖かい日には、帰られましたからご縁にしばらく日光に当たつては、又お寝みになるという風でございます。

毎日がいをされておられました。それでも少しづつお手紙を書きになつたりして、ただ少ししつこい風邪ぐらいに思つておられました。毎日二本の注射をしておられました。十一月の五日から六日ぐらいまでずつと毎日続けておられました。時々寒気がするとおつしやいまして、お止めになることもありました。ある時……その時はまだはじめの頃でしたが……ちよつと気分がおよろしいようでした。晩御飯を一緒にいただきました時、こつこつとおつしやつておられました。

「毎日毎日俺みたい、骨と皮のこの胸に注射をするのだが、今日は熱があるようだ」といふも事務的にただ注射だけして、効くといえは痛いだけだ」とおつしやつていらつしやいました。十日の夕方から、40度以上のお熱が出まして、

ネットで 森信三先生と修身教授録 と検索

食欲は全然なく、時々奥様が無理におすすめに
なりますと、二口ぐらいお上りになりました。氷を
買ってきて冷やし通しに冷やしておられました
が、まる二日というものは全然下がりませんでし
た。

十二日の朝は幸い下がったものですが、少し
安心いたしました。「脈がどうも多い」って奥様
は案じておられました。十二日の朝東外科に診て
頂きました。十一日の晩に横山さんが来て診られ
たら、ひどく左手が腫れて固くなってしきりに「痛
い痛い」と訴えられますので、東外科が十二日の
朝診られました。このときすでもうダメだと思
われたんでしょう。奥様の方には何ともおっしや
られませんか。「肺炎にでもなればなるでしょう」
などと言っておられました。

壊疽性丹毒敗血症といって肝臓をやられてしま
ったのです。腐ってしまうんだそうです。熱が40
度以上出たときに、もはや毒が回ってしまつたん
だそうです。どんなに元気な人でも、これにやら
れましたらすぐだそうでございます。もう少し早
く気がついたらとすれば、左手を切断しなければな
らないのです。風邪気の際に田村さんが「じつと
休まれた方が良いでしょう」とおっしゃっていま
したのですが、横山さんが面倒がられますので、
通われましたのですが、この頃は何でも注射注射
で、きつと病院でも消毒が足りなくなつて、そこ
から菌が入ってあんなになりましたのでしよう。

十二日の三時ごろ弟様に当たられ方に、電報を打
つように、自分で電文をおっしゃられまして、ど
うも容体が思わしくないから来てくれと自らそう
おっしゃいました様で、まさかその日の夜中の三
時に、亡くなられようとは夢にも思いませんでし
た。

六時ごろから急に悪くなりました。大阪へ長距
離電話をかけるやら大騒ぎ、東さんと呼んでもな
かなかいらつしやいません。十一時ごろ見えて強
心剤の注射をしたりしました。奥様は顔を傍につ
けながら、しきりに話をされるのですが意識がボ
ーッとして時々しか分かりません。

「あんたは何の覚悟もつかない中にこんなにな

つてしまつて、本当に寂しゅうござんな」と言わ
れましたら「ウン」と頷かれました。西川さんと
いう方を電報で呼びましても取り付いでくださら
ない。東さんが学校関係の方をお呼びになりまし
たらとおっしゃいましたけれども、もうすでにダ
メで、息遣いがとても苦しくなつておりまして、
「ハアハア」と苦しい息をしていらつしやいまし
た。

奥様が「何か私に言っておくことはございませ
んかな」と言われましたら「もう何も無い」とお
っしゃいました。きつと心残りだったことと思
います。

「もうすぐ順蔵も信蔵もまつも和子も帰ります
ぜ、皆が帰ってきて賑やかでようござんな」と言
われましたら、「うん」とうなずかれ、その時一
言「お正月だろう」とじつと目を潤ませまして、
寂しかったのでしよう。このお正月をどんなに楽
しみにしておられたことのように、私もまだ夢
のような気がいたします。ちようど午前三時に亡
くなられました。

十五日がちようどお葬式でございました。その
日、賀陽宮に御講義をなさつておられましたので、
ご香料が下りました。宮内省より目録御品が二疋
(ひき) 御下賜されました。

先月二十五日畏くも天皇陛下より勅二等旭日重
功章下授のご沙汰あらせられ、十二日に広島文理
大学長の許に届きましたので、直ちに御霊前にご
報告になりました。重功章というのは滅多に類例
がないとのことで、奥様もこの光栄に感激してお
られます。今は広い家の中に誠に寂しゅうござい
ます。広島に嫁していらつしやいますお嬢さんの
坊ちゃん、この二月で二歳になられました。お
お乳を離さなくてはいけないので、五つつになる
お嬢さんと二人お預かりしております。奥様も氣
が紛れてよろしいかと思ひまして…。

(以下略 信)

(「開頭」昭和27年6月号通巻第60号)
芦田恵之助先生の御臨終の模様次第、西晋一
郎先生の模様である。これを拝読して思うのは、
死はある日じわじわ、もしくは突然やつてくるが、

その期を知る人は多分ないであろうということ
だ。ほん最期まで意識が正常のお方は多分ない
であるうし、お別れの挨拶が出来た人はないので
はないか? ということだ。(二繁)

「修身教授録」探求 (第百二十九)

婦人と経済

森 信三

子どもらは寂しくあれや
暁の岩かげにゐて物を言ひたり

赤彦

この一首で問題になるのは何かというところ、それ
はおそらくは、第二句の「寂しくあれや」というコトバ
でしょう。これがもし「かなしくあれや」とあつたら、
全然打ち壊しになってしまひましよう。というのも、こ
の際における「さびし」は、前の「かなし」が「哀し」
と共に「かなし」の意味をもこめていたのに対して、
この「さびし」は「愛し」でもなければ、またもちろん
「哀し」でもないからです。では何故「さびし」とい
かというに、ここでは親子の關係は直接ではなくて間接
的だからでしょう。ですからそれが直接的だつたら
おそらく「哀し」とか「愛し」となることでしょう。

■女性のねうち

われわれは男性のねうちと女性のねうちとで
は、その標準がよほど違うんではないかと思つて
います。ところが今日わが国の教育では、この点が
割合にハッキリしていないで、女子の教育にも男
子の教育と大同小異の態度で當つているところ
が、少なくないように思つております。そもそも
も男のねうちというものは、何か一つの事柄に対
して、独特の腕前の有ることが大切であります。
そしてそれは必ずしもその如何を問わないので
す。つまりどの方面でもよいから、とにかく優れ
ていさえずれば、それで一応この世において、一
家を支えてゆくことが出来るのであります。それ
ゆえ碁とか将棋のような、本来娯楽に属する事柄
でさえ、真に優れた腕前を持つていれば、優に一
家を成しうるわけでありませぬ。しかるに女性の場

合には、必ずしもそうとは言えないようでありま
す。否、女性の場合には、何か一の特技がある
という事が、かえってその人を不幸にする場合さ
え少なくないともいえましよう。かの「器用貧乏」
などというコトバも、こうした真理の一面を言っ
たものかも知れません。即ち女性の場合には、そ
の「一つの特技のために、かえって女としての家庭
的な仕事がつまらなくなったり、ないしは良人を
もその技で支えねばならなくなったりもするので
あります。否さらにはその為、生涯を独身で過
すという場合すら少なくないのです。いずれに致
しましても、女性としては決して幸福な道とはい
えないでしょう。

そこであなた方は、何よりもまず女性のねうち
は、男性のそれとは、その標準が違うということ
を知らねばならぬでしょう。即ちそれは男性のよ
うに、一つの事に専門的に通じるということでは
なくて、端的に申せば家事が巧みであるというこ
とが最も大切なことといえます。例え
ばきれいな掃除が上手な上に、料理が巧
い。それに子どもの躾がよく行き届いている。そ
して最後に経済の始末がよい。大よそのような
平凡といえれば至極平凡な事柄の上に、女性の賢さ
とそのねうちの標準があると申してよいでしょ
う。そこでもしこれらの事柄に手抜きがあると
したら、たとえ他の方面では、いかに優れた点が
あったとしても、女性としてはあまり香ばしいと
は言えないのであります。今日の女子教育では、
どうもこの辺のことがハッキリしない恨みがある
ようであります。しかるに家庭における実際から
申せば、何と言つても、以上申したような事柄が、

女性の値打ちを決定するということは、どうも動
かない事実のようであります。そこで仮に学校の
成績はかなり良かったとしても、以上挙げたよう
な点が得意であれば、結局その人の家庭生活は
芳しからぬ結果となり、これに反して、以上のよ
うな点が整っていれば、仮にその人の学校時代の
成績は、それほど優秀でなかったとしても、女性
としては、至極順調な道を歩むことが出来ると申
せましよう。この辺のことは、あなたがたも今日

から深く考えておかれる方がよろうと思いま
す。

■経済のしまり

さてそれらの中でも、経済の縮まりが良いとい
う事は、また違った意味でも最も大切な事柄と思
うのであります。どんなに他の方面が優れていま
しても、経済の縮まりが悪くて、いつも月末にな
ると困ったり、また不時の出来事が起こると慌て
ふためくとかいうようでは、女としては、全く零
点という他ないでしょう。かりに学校時代に一番
であったという人でも、一旦家を持ってから経済
が下手とあつては、女性としては、全く落第とい
う他ないでしょう。

あなた方も、すでにご承知かと思いますが、先
日も市内のある小学校の奥さんが、ご主人に内緒
の借金が嵩んで、ついにどうにもならなくなり、
とうとう家出したという記事が新聞に載っていま
したが、おそらく女としてあれほどの不体裁かつ
不始末な出来事はちよつと、ちよつと珍らしいと
いつてよいでしょう。

わたくしは今学期の始めに、わたくしの処へ高
利貸の案内ビラが参りましたので、現在直接の必
要はないと思いましたが、念のために天王寺
の専攻科生と四年の人には、その話をしたことで
した。しかしあなた方は女のこと故、まさかその
必要もあるまいと思つて控えていたのでしたが、
しかしあつた出来事があつてみますと、女の
人々にも一度くらいは高利貸の話もしておくこと
が、万ざら無益でもないかと実は驚いているしだ
いです。

あなた方はご存じないでしょうが、高利貸とい
うものは、決して自ら高利貸と名乗るものではあ
りません。そうではなくてみな「信用金融」とか
「信用貸金」とかいうふうな、体裁のよい名前を
掲げているのです。しかしこの「信用」という二
字が実は曲者であつて、この信用の二字こそ高利
貸の高利貸たる何よりの証拠といふわけでは、必
ず、普通他人から金の融通をうける場合は、必

ず担保とか抵当とかいうものが要るわけです。つ
まり借金とはほぼ同額のねうちのちある土地とか株
券などを相手に預けて、それと引き換えに初めて
金が借りられるわけであります。然るにそれが要
らぬというのが、つまり高利貸であつて、そこが
また彼等のつけ込む処なのです。それゆえ「信用
金融」というように、とかく信用という一字がつ
いていたら、絶対に例外なく「高利貸」と断じて、
それこそ千に一つの間違ひはありません。この事
はくだいようですが、一度高利貸に引掛つたら、
人間生涯浮びようはありませんから、とくに申し
ておきたいです。

では一体どうしてそんな高利貸のビラなどが、
わたくしなどの処へ来たのでしょうか。高利貸の
ビラが来たなどというところ、あなた方は変に思われ
るかも知れませんが、そもそも高利貸というもの
は、学校教師とか府市の吏員、さらには相当な会
社の社員の処へは、色々な手蔓によつてそれぞれ
その名簿を手に入れて、年に一二回は広告を配る
ことにしているのです。それと、これが、これら
俸給生活者というものは、とかく担保に入れるよ
うな資産を持たぬものが多いのです。そこで正式
に担保を入れねばならぬような処では、金の融通
は利きにくいわけです。そのうえ職責上、あまり
無茶なことも出来ず、いざとなれば俸給を差し押
さえるという手もありますから、そこで高利貸と
しては上得意というわけです。かくして相当な位
置にある人でも、高利貸の魔手に陥入つてひどい
目に会い、ついにはその職を棒にふつた人も少な
くないのであります。

ですからあなた方のような女の方でありなが
ら、万一高利貸に引掛つたとしたら、それこそ実
に言語道断の沙汰で絶対浮かびようはありません。
ですからそれだけに平素経済に注意して、た
とえ如何なる事が起ろうとも、夫をして高利貸の
罠にかからせないだけの用意が必要でありましょ
う。即つねに貯蓄のゆとりがあつて、如何なるこ
とが起つても、うろたえないだけの準備をしてお
かねばなりません。あるいはさらに山内一豊の妻
のように、万一の場合の蓄えを、夫にも知らさず、

